

藤林 悠 / 小野 冬黄

2021.11.20-12.05

戸田 祥子 / 三枝 愛

2022.01.15-01.30

平野 泰子 / 衣 真一郎

2022.03.12-03.27

佐藤 史治と原口 寛子 / 関 真奈美

2022.05.14-05.29

図師 雅人 / 田中 永峰 良佑

2022.07.02-07.18



完璧に抗う方法 - the case against perfection -

「完璧に抗う方法 - the case against perfection -」は、図師雅人と藤林悠による企画展覧会です。企画者を含む9名と1組のアーティストが、2人展を隔月で開催していきます。最終回となる第5回目は、図師雅人／田中 永峰 良佑「“うた”へ対う（責任あるいは、わりきれなさから）」

この展覧会は、アーティストの図師雅人と藤林悠で立ち上げました。2人展形式の美術展覧会の開催にあたり、事前にリサーチとして出展作家の制作を始めた動機、過去作のすべてについてなど、作品にまつわるインタビューを行い、その内容から抽出しコンセプトを作成しました。アーティストの営みについて彼ら/彼女らの言葉を通してその経験を集積し、発された表現そのものがまた自身の元へ還るまでの過程を垣間見ようとしています。

※藤林悠は第3回目の終了を持って、企画運営から離れました。 [>>詳細について](#)

図師雅人／田中 永峰 良佑「“うた”へ対う（責任あるいは、わりきれなさから）」

会期：2022年 9/3（土） 4（日） 10（土） 11（日） 17（土） 18（日） 19（月・祝）（土、日、祝のみ開場）

<http://awobasoh.com/archives/2277>

開場時間：13:00 - 19:00

会場：あをば荘

住所：〒131-0044 東京都墨田区文花1-12-12

URL：<http://awobasoh.com>

問い合わせ：enhancement.exhibitors@gmail.com

アクセス：京成電鉄・都営浅草線・東京メトロ半蔵門線・東武スカイツリーライン 押上駅から徒歩14分

東武鉄道亀戸線 小村井駅から徒歩9分

東武スカイツリーライン・東武亀戸線 曳舟駅、京成電鉄押上線 京成曳舟駅 徒歩20分

イベント情報：アーティストトークの公開

各会期の期間中に、参加作家と企画者のトークを収録、ウェブ上で公開。本展のテーマや展示に至るまでの経緯、そして各々が展示にどう向き合ったのか話します。詳細はあをば荘HPにて

例えばかつて、フィールド・ハラーやワーク・ソングが暮らしの中にあった。過酷な労働のなか絞り出される、憂いをおびたその声に、光を感じるのはなぜだろうか。本展は図師雅人、田中 永峰 良佑の活動と展望から、結果この問いへの態度を見出しつつ、本企画「完璧に抗う方法」の最後を締めくくる。

図師は、近年の活動において、言葉の持つ奔放さにどう向き合うのかということに傾注し、用いることへの「責任」を語る。そもそも言葉自体、さまざまなものとの情報交換のために存在しても、統制のためだけにあるのではない。だからこそ彼は制作の起点となる言葉を、イメージと物がともなう作品へと受肉させる際、かたち・手法・素材の関係性を考案しつづけている。

田中の作品は、家族や友人、恋人、特殊な状況下にある人たち、そして彼らの背景にある社会と自身の関わりを問う、パフォーマンスやインタビューをベースとした映像作品を作ってきた。彼の他者への態度は、関わる人々の生きる土地、歴史、社会状況、その中で心の肌理を浮き彫りにしていく。彼の作品に映し出される人と向きあう者は、彼自身も述べる「わりきれない」気持ちと共に、私たちの現在について考えざるをえない。

彼らのインタビューや作品をとおしみると、「声」や「うた」が彼らの活動に共通していることがみえてくる。図師は作品の中でテキストの作品や、言葉を交えた作品が少なくなく、それらはどこか「詩」のようにもみえる。彼の語る生活には、アーティスト以外の活動の場所に子どもたちや障害のある人々との関わりがみえてくる。彼の作品にそういった人々の「声」の影響があることは、想像にかたくない。

田中自身はまさにその態度が、関わる人々の「声」と共にある。そして作品には、たびたびその人や土地に関わる「歌」が流れることがあり、その多くは私たちも聞き馴染みのあるものだ。彼はそういった楽曲を用いることについて、彼が関わる人や土地、社会と私たちをつなぐものであると、託すかのように述べている。

彼らには、自身や他者が発する「声」を「うた」へと対峙するをえない切実な動機があるのだろう。その態度は、冒頭に述べた問いへと通じているように感じる。そして私たちは「うた」に、時を超えて継承され、のちの人々が再び語り、うたい、時にはかたちをかえても発せられることができる力をもつことも忘れてはならないだろう。

図師雅人 ZUSHI Masahito 1985年宮崎県生まれ。奈良県在住。2010年 筑波大学 人間総合科学研究科博士前期課程芸術専攻総合造形領域 修了。
目の前にあるものが様々な時や空間において 開かれるような形や場のあり方を探るため、素材やヴァリエーションを限定しない制作をしている。主な展示に、「Communication/Cut-up/Atmosphere」(2019年 あをば荘・東京)、「Enhancement」(2017年 Space Wunderkammer・東京)「いしをできるだけ遠くへうつす方法」(2015-16年 float・東京)、「ガラスのアトラス」(2013年 あをば荘など墨田区4ヶ所同時開催)。他、創業支援施設BONCHIでのディスプレイ(2020年・奈良)など。



《隠す、暴く、断つ、交ぜる、それでもなお、とる、うたう、にがす》2019年

田中 永峰 良佑 TANAKA N. Ryosuke 1990年 香川県生まれ。東京都在住。東京藝術大学大学院美術研究科 絵画専攻壁画研究領域 修士課程修了。
「社会の中のそれぞれの『私』」という言葉大切に、この世界で生きるそれぞれの人生の可能性を探っている。また社会に溢れる情報や観念に、自分自身が実感できるものとしてできる限り触れて、その距離を変えて生きたいと強く願っている。「風景泥棒3」(2021年・京都)、「Exultation is the going」(2020年・東京)「hello/ENTER」(2020年・シンガポール/東京)、「Nonsense Agency」(2019年・台湾)、個展「As a flower」(2019年・東京)など。



《As a flower》2019年

「完璧に抗う方法 - the case against perfection - 」 出展作家

藤林 悠 FUJIBAYASHI Haruka

小野冬黄 ONO Fuyuki

戸田祥子 TODA Shoko

三枝 愛 MIEDA Ai

平野泰子 HIRANO Yasuko

衣真一郎 KOROMO Shinichiro

佐藤史治と原口寛子 SATO Fumiharu & HARAGUCHI Hiroko

関真奈美 SEKI Manami

図師雅人 ZUSHI Masahito

田中 永峰 良佑 TANAKA N. Ryosuke

本展にむけて

本展は2017年、アーティストの図師雅人と藤林悠による行われた展示「Enhancement」（※1）に端を発する。「身体」という共有のテーマの認識、そして当時私たちにでさえ、ありふれて聞こえるようになってきていたSingularity（シンギュラリティ、技術的特異点）という、漠然としながらも変化を訴えかけてくる時世への、各々の立ち位置を考えることが展示「Enhancement」の目的だった。

その後も図師と藤林による議論は継続して行われ、2人の関心はSingularityやEnhancementといった力ある言葉には決して括ることができない、アーティストの「営み」（※2）自体へと目を向けていくことになる。生きていく環境の中で、無数の事物の流動にさらされながら、作品を制作し、それを社会に開くアーティストたち。社会に影響を与えつつ、と同時に自らがつくり上げた作品とそれによって生じた社会からの影響を受けて、アーティストもまた変容する。そこには、終わりがみえず、しかし、だからからこそしなやかで毅然とした、社会・環境変化へのアーティストの態度が今も、そして連綿と続く歴史の中にもみてとれる（そして、この態度は他の者たちへ連鎖できる）。

本展「完璧に抗う方法」（※3）は、この「営み」の力学や、それを生み出すアーティストたちが生きる環境を知るために現代を生きる9名と1組の参加アーティストたち（※4）へ、幼少期から現在の活動（収録時）までに至るインタビュー（※5）を長い時間をかけて行っている。展覧会はそのインタビューから紡ぎ出されたアーティストたちの関係性を編成した5つの会期によって構成される。

各会期のテーマは個別性を持つが、それぞれの会期と関係を結ぶことで、現代の私たちが思慮すべき事柄を多重複層的に含んでいるものになるだろう。願わくば、本展のアーティストたちの「営み」が交わり、生み出される複数の環境から湧き出た事物が、また、いつかどこか誰かの、できればあなたの「営み」へと流れ出すことを期待する。

※1 Enhancement …「増強」「増進的介入」と訳される先端科学医療技術の用語でもある。「治す」のではなく、遺伝子操作、投薬、人体改造など元々の健康状態の身体や精神に影響を「加える」技術。人間観の変質や優生学的差別にも結びつきかねない観点から、議論が重ねられている。展示「Enhancement」はこのトピックから示唆を受け、図師と藤林というアーティストの心身状態とメディウム、そして制作や制作環境との関わりを考え直すものだった。会場はSpace Wunderkammer（2017年3月24日～4月9日、金土日のみ）。期間中、富安由真、田中永峰良佑、奥村直樹、菊池良太、佐藤史治と原口寛子を招いてのトークも行った。

※2 「営み」というテーマにおいては、本展の会場となる「あをば荘」も非常に重要な意味を帯びる。2012年より墨田区の古い集合住宅の一部を改装し、企画スペースとして運営しているオルタナティブスペースだが、2階を企画者たち自身の住居にし

ていたこともあったりと、生活と表現が分かち難く結びつく場でもある。これまで運営に関わってきた者も、アーティスト、美術・演劇関係者、農業関係者、福祉従事者など多様である。

※3 本展のタイトルは書籍「完全な人間を目指さなくても良い理由 遺伝子操作とエンハンスメントの倫理」（マイケル・J・サンドエル著、林芳紀・伊吹友秀訳、2010年、ナカニシヤ出版）の原題“THE CASE AGAINST PERFECTION”を、企画者たちが意識したものである。本著は、企画当初の図師・藤林によるリサーチや対話、振り返りの中でたびたび取り上げられてきたものである。

※4 本展によって私たちが意図するものは、本来すべてのアーティストが対象であることは自明である。そのため今回参加をお願いしたアーティストたちは、テーマに照らし合わせた上で、図師・藤林が自分の眼で作品をみて、言葉を交わした、それぞれの具体的な経験に基づく作家が挙げられている。結果的に同世代の作家が集まっている。

※5 本展のために実施されたアーティストたちへのインタビューは、展覧会後にまとめられる記録集にて一部掲載される予定である。

展覧会全体の情報PDF： http://awobasoh.com/wp-content/uploads/220426_kanpeki.pdf